遠江・山と里の民俗
会報　第012号

大人気の記念撮影は長蛇の列でした

横尾歌舞伎 サハリン公演

横尾歌舞伎保存会　会長　高井　勇

11月10日（土）、11日（日）ロシア・サハリン州ユジノサハリンスク市のスタリッツアで歌舞伎公演を行いました。「ロシアにおける日本年」の文化交流行事として開催されたもので、サハリン初の歌舞伎公演ということもあり、2日間で計1200人を超える観客を迎えることができました。

保存会としては平成9年以来2回目の海外公演でしたが、前回（20年前）の参加者は一人もおらず、全員が初めての体験でしたが、参加者全員と舞台用具が無事に帰ってきたことをうれしく思います。

渡航1週間前には搭乗予定の航空会社が運航停止となり、直行便ではなく乗り継ぎでサハリン入りするスケジュールに変更されるなど、波乱含みの様相だったため、帰国時はホッと胸をなでおろしました。

訪問団は保存会37人、市役所随行1人の計38人で、舞台用具37個口とともに成田空港からウラジオストク経由でユジノサハリンスクに向かいました。現地到着後は、休む間もなく会場入りし舞台設営とリハーサルを終え、開演を迎えました。公演は2日間とも同じ構成で、映像と保存会役員による横尾歌舞伎の紹介の後、「菅原伝授手習鑑車曳きの場」を披露しました。

上演後は主要役者と後見が登壇しインタビュー形式による解説の後、来場者とともに記念撮影を行いました。ロシア語の字幕表記を添えた歌舞伎の上演自体はもちろんですが、記念撮影が大人気で順番待ちの長蛇の列ができるほどでした。

受動的な芸術鑑賞としてだけでなく、より能動的に日本文化を体験するアクティビティとして歌舞伎（地芝居）公演を楽しもうとするロシア人の気風を強く感じました。

また、振り落とし幕などの舞台設営や化粧・着付といった、保存会としてごく普通に行っている作業が、ロシア人からは極めて高度な特殊作業として見られていました。横尾歌舞伎保存会が単なる芝居を演じる団体ではなく、日本文化を継承し創造するクリエイティブ集団として見られており、「何かワクワクすることをやってくれる！」期待感を持って迎えられていたことを肌で感じました。

いずれにしましても、鑑賞されたロシア人のみならず、公演に関わった関係者一同、歌舞伎（地芝居）を通じた感動と興奮を味わい、日ロ文化交流推進と横尾歌舞伎継承活動活性化のインスピレーションを得たものと確信しております。

今回、日本を代表してサハリンの地で歌舞伎公演を行えたことは、保存会の貴重な財産として後世に受け継いでいくとともに、これからも日本文化を継承し、その魅力を発信していけるよう努めてまいります。

賀久留神社神幸祭

賀久留神社総代　池谷和廣

「闇淤加美神」の二神、後に「氣長帯比賣命」「譽田別命」「玉依比賣命」の武運長久、武勇の八幡宮が祀られた。貞観年間の「八幡」勧請までは農業すなわち「産土神」としての神であった。

八幡勧請の後、南北朝動乱時には、宗良親王の祈願、足利義尚公、今川義元公、伊奈忠次公、徳川家光公、歴代浜松藩主、吉田藩主よりの庇護を受けていた。

賀久留の里

「賀久留」という地名は、不思議な地名らしい。「賀久留」は「隠れ」に通じ、「籠る」と同意と考えられる。古代日本語から「こもる」という語は、古代和歌の枕詞「こもりく」「隠国」に通じ、すなわち不思議な聖なる場所を意味している。「遠江風土記伝」にも、当地に「隠れ川」「隠れ池」が存在すると記載されている。「古東海道」から眺めて不思議な聖なる場所であった証拠でもある。そんな谷の奥が現在の「神箇谷」になったであろう。

賀久留神社は、延喜式神名帳所載の「遠江敷知郡賀久留神社」である。最初は「闇御津羽神」を願って行われたともいわれている。

賀久留神社が賀久留の里の古くからの産土神、この土地の農業の神ということを考えると、つまり神の行幸と豊作祈願の両方の意味があるものと思われる。

現在の行列は、拝殿の文化年間の絵図に基づいて、塩薪、前警護、鉄砲、貝吹、獅子、翁太夫、官女、姫、幡、幟、拝王子と行列を組んで御旅所へ向かう。人数の増減等多少の変化は見られるが、二百年の伝統を今に続けている。

デコ様と呼ばれる人形

■神幸祭の行列

神幸祭の行列の起源は、平安時代の貞観四年の「宇佐八幡」からの八幡様を勧請した時の遷宮行列に端を発したとも、室町時代の応永年間の飢饉の折に豊作

■手草の舞（田楽）

賀久留神社の田楽（手草の舞）は、神幸祭当日、本殿前、旧宇布見道と参道入り口、旧大門前）と旧宇布見道、御旅所入り口の三か所で舞われる。拝王子、獅子、翁、官女が拝王子を先頭に三回、回る。（本殿前では、手草の舞も加わっている）。なお、拝王子は手草を振りながら回りそのあとを獅子、翁、官女が続く。

■拝王子と獅子の競走

拝王子の服装は、渡来南蛮人とも、室町時代の農兵の服装とも言われている。神である拝王子は見たことのない渡来南蛮人と農地を守る農兵の両方の意味を持たせている。

獅子は本来神の前で舞を舞い神に演技を奉納する役割を負っており、は神の使いの拝王子と競走する。拝王子が勝てば豊作、獅子が勝てば凶作ということになる。当時は若者の「駆け比べ」ではないかとも思われるが、現在のように拝王子が必ず勝つようになったのは、八幡遷宮以降ではないだろうか。拝王子については、「遠江風土記伝」では、天武天皇の長皇子をイメージしていると書かれているが、神と皇子いずれにしても尊敬崇拝される意味では大切な行事である。

以前は祭りに参加する主役、拝王子と獅子のように中心になるものは宮に宿泊し、宮の西の御手洗池、前浜、裏浜で精進潔斎して参加したという。神である拝王子は浜で禊を行い、「某君」として名は明かさず、神聖な役割を担っている。

獅子との競争で拝王子が勝てば豊作

■御旅所

御旅所は、東神田川のほとり、「遠江風土記伝」に言う「隠れ川」のほとりに当たる場所である。この川は同書の「加久禮池」を水源としている。実りの第一要件の水に関係した場所である。ここは、社宝に関わる伝説「竜の面」の舞台であり、入野の草堂の森起源の舞台である。前の丘は「安行平」と呼ばれ「秦氏」の関連地名と言われている。秦氏は、土木と水の豪族である。ここはまさしく聖なる場所であり、仮宮である。

拝王子は獅子に勝ち、道祖神の注連縄を切って祭りは終盤を迎える。門には「表立」と呼ばれる門番が立ち聖なる場所が里人に開かれ、里人皆に豊作と幸せがもたらされたのである。

西浦田楽　34年ぶりに国立劇場公演

浜松市　文化財課

今回の国立劇場での公演は、寺院で年の始めに多幸を祈る修正会に由来する「田楽」の芸能であり、地方に伝播する中で各地の風土の影響を受けて変容していくうち、新たな春を迎える民俗行事となった芸能として「田峯田楽」と共に昼・夜二部構成（田峯田楽とは別公演）で上演されました。

当日は地能から「庭ならし」「御子舞」「高足」「高足のもどき」「麦つき」「水口」「鳥追い」「惣とめ」「田楽舞」「のたさま」が、はね能から「しんたい」「梅花」「猩々」「弁慶」の計14演目が約２時間かけて上演されました。

この国立劇場での公演に先立ち、西浦田楽保存会の守屋治次前会長から公演に対する思いを寄せてもらいました。

『保存会長を務める私のもとには、現在もよく公演の依頼がある。26日には34年ぶりに国立劇場（東京・千代田）で公演する。

月の光と大松明が照らし出す独特の雰囲気を演出で再現してもらうので楽しみだ。

父からは生前「外での出演には気を付けるように」と再三注意された。時間や制約を受けると、行事本来の姿を見失いかねないからだ。』

西浦は市街地から遠く、外部に影響されにくい環境にあるのも長く続く理由の一つだろう。黙々と神事を守ってきた先人たちのためにも、伝統を崩すことなく次代につなぐのが私の役目だ』

「御子舞」上演の様子（写真提供：国立劇場）

国立劇場での公演は前日のリハーサルから見学しましたが、行事本来の姿を表現するため、西浦での本番にならって楽屋での準備からリハーサル終了まで草履を脱がずに通すなど、外部公演だからこそ「西浦田楽の精神」を守ることを意識しているように見受けられました。また、上演する演目については『昔の人の構成・演出力はすごい。演目の随所に飽きさせない工夫がある。例えば足かけのついた一本棒に乗り、２人で問答をしながら跳ねる時間の長さを競い合う「高足のもどき」。即興を取り入れた愉快な演目で、観客の笑い声が聞こえてくる。夜通しだから、見る方も演じる方も楽しめなければ成立しない』と触れた言葉のまま、地能の「高足のもどき」では国立劇場でも即興を取り入れた掛け合いで観客の笑いを誘いつつ、はね能「しんたい」等では芸術性を感じさせる演目で観客を静かに惹きつけ、西浦田楽の魅力を伝えていました。

国立劇場の演出も素晴らしく、現地の雰囲気を再現した楽堂とその脇で焚かれる松明、月の出や朝焼けの空などが演出され、夜を徹して行われる様子がよく伝わる演出でした。

西浦の田楽について魅力を再認識するとともに、今後の外部公演での演出の参考となる公演でした。

「しんたい」上演の様子（写真提供：国立劇場）

編集　浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行　浜松市　電話〇五三-四五七-二四六六

平成30年度　「浜松市認定文化財　無形民俗文化財の部」

東区　笠井町　笠井町春日神社の神輿渡御

笠井町の春日神社で夏季に行われる神事。神社からお仮屋（天満宮）への神輿の行列を渡御（とぎょ）、翌日夜に神社へ帰還する。 神輿の行列を還御（かんぎょ）という。行列は笠井街道を通り、沿道には神輿へ家内安全や無病息災を祈る市民、観光客が訪れる。神社文献の記録では、明治14年（1881）には行われていた。

北区　引佐町奥山　馬門の神楽

引佐町奥山の馬門自治会で1700年頃から受継がれている神楽。方広寺の開山忌（かいざんき）や半僧坊の大祭に天竜の光明村が神楽を奉納してきたものを馬門部落が引きついだとされ、現在は半僧坊の祭典と奥山神社の祭典で奉納を続けている。

北区　引佐町奥山　奥山の手筒花火

引佐町奥山で地域の神社祭典で奉納される手筒花火。開始時期は不明も富幕地区（開進社）では戦後すぐに方広寺や奥山神社で奉納したと伝わっており、その後、西四村地区（南部連盟）、中村地区（中煙会）に広り現在は協働で活動を続けている。作製方法は経験者から初心者に教え伝える。

北区　引佐町小斎藤　「小組」の屋台行事とお囃子

毎年、9月の最終土・日に開催される奥山神社の祭礼に小斎藤地区として、生き人形を乗せた屋台及び笛や太鼓をお囃子として奉納。横尾歌舞伎保存会の協力を得て、地区の小学生が歌舞伎の立役と女形の生き人形役となり、歌舞伎の衣装や化粧を施し、屋台に乗り顔見せをしながら、小斎藤地区内から奥山神社まで引き廻す。

浜北区　尾野　金刀比羅神社巫女神楽

安政3年（1856）、初めてお神楽を21日間奉納したところ参拝者があとを絶たず、以来、村人たちで奉納されるようになったとされる巫女神楽。翌年には神楽殿が落成。以来、絶えることなく、現在も小学生の舞子により神社の春祭りと例大祭に奉納されている。

天竜区　水窪町　水窪の祇園祭り

毎年6月14・15日に怨霊鎮（しずめ）と疫病平癒（へいゆ）を祇園様（牛頭天王/素戔嗚尊）に願う年中行事。昔は家ごとに柏餅を作ったり、夏野菜を使って御馳走を作って祇園様に捧げ、花火を上げてお祀りしていたが、現在では花火だけを上げる家がほとんど。大正14年（1925）に起きた水窪大火の戒めのため、花火をできる日を限定したのが始まりとも言われている。

天竜区　水窪町奥領家　水窪の削り花

水窪の削り花は、小正月（1月14日・15日）に飾り付けるもので、小刀を使い木の枝の表面を薄くそぎ、花びらに見立てているのが特徴。その年の五穀豊穣を祈り、あらかじめ祝福する意味があるとされる。主に長野県との県境に近い水窪町北部の民家で継承されている。

笠井町春日神社の神輿渡御

水窪の削り花

水窪の祇園祭り

奥山の手筒花火

「小組」の屋台行事とお囃子

馬門の神楽

金刀比羅神社巫女神楽